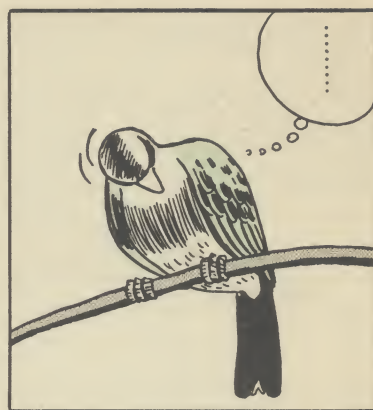
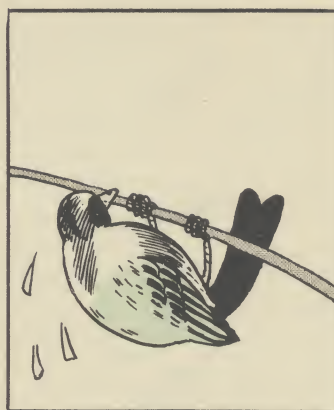
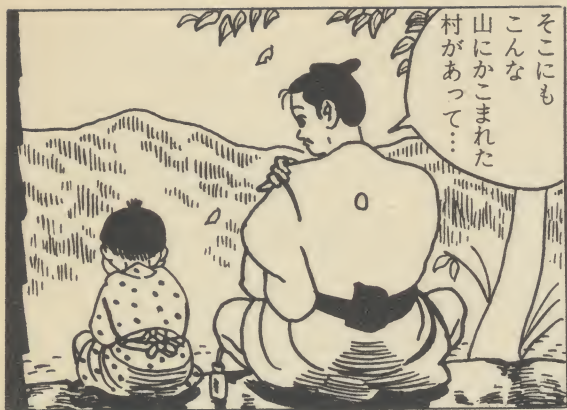
こくう物語
(八)ウソツキ
鈴木翁二
これまでのあらすじ
みんなが心配した
かれんの病気もなおった。
ここで話しは少し前に
戻り、かれんがまだ熱を
出していたある一日。

イッケピッ

ホマ

ギィイース
ギィース

おじさんは
なんでもかんでも
知ってんだろ？
ほかー
ほか
ぽと

おうさ！
当り前だろ
なぜカユイか？
とかな
あっ
平ちゃん
また吹いて
吹いてッ

そんじゃ
なんで
ウソつく
と………
はぷー
はぷー
つおーっ
日が
シミル

地獄に
おち
るんだ
ギュッ

え………

ふうん
……
それネ
………
つまりだ

あっ
いま考え
てらあっ

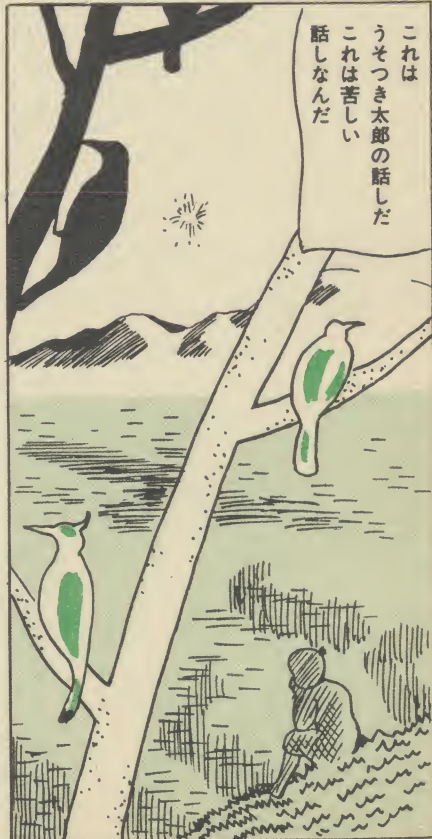
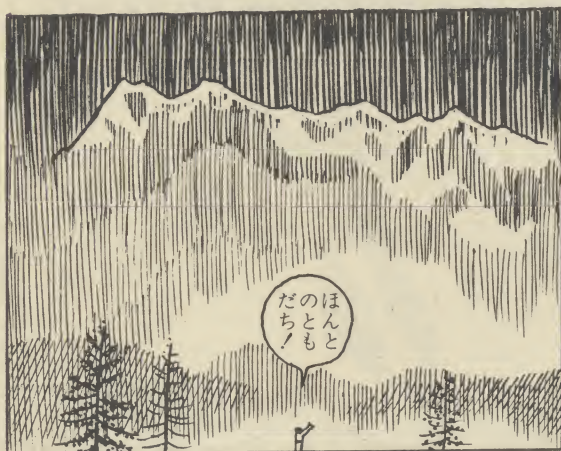
なぜウソをつくと
地獄に行くかと
いうとだなあ……
あの山のう～んと
向こうにも
国があってな
…………

そこにも
こんな
山にかこまれた
村があって……

親も兄弟もいない
一人ぼっちの
男がいたんだ……
サワ
サワ
サワ

これは
うそつき太郎の話しだ
これは苦しい
話しなんだ

その前にまず
なぜ太郎がそんな
ふうに呼ばれることに
なったのか、そのあたり
から話してみよう
じゃないか

君が夜の夜中に
目を覚ますように、
太郎も目を覚ます
頭の夜中にね

太郎は
親無しの
一人者のベケ
だから……
うん
めえや
「こんな世の中に
俺みたいにうらめ
しいやつがまだいる
だろうか……？」
カラスは「ププイ」
と笑ったね

ある日なんだ
太郎はそいつにうまい実をわけてあげたんだ
おくれ
うん

こうしていつも二人は遊ぶようになった磁石のようについたり跳ねたりして遊んだのだ
ほんとのともだち？
うん
愉しかろうな「このやつだけとはいついつまでも一緒にいたいなぁ」だから……「おれたちほんとのともだちだよね」太郎はきいて
「そうだよ」ともだちは遠くを見ながら言ったのだ

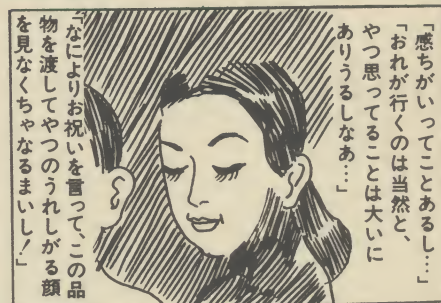
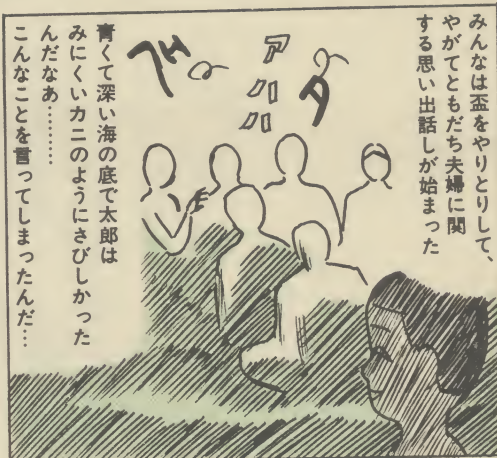
空は青い、森は緑で二人はねそべって……
そのとき太郎が望んだのは何だったのかな？

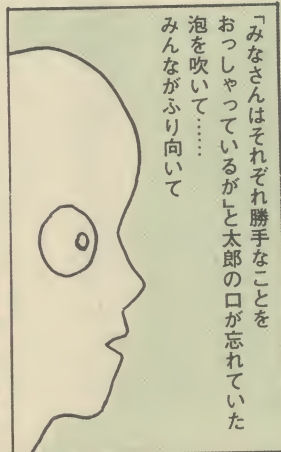
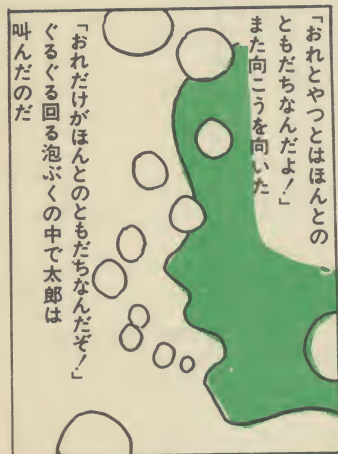
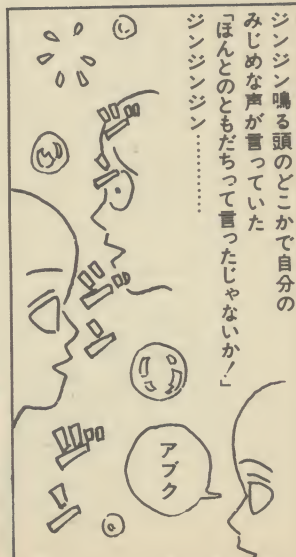
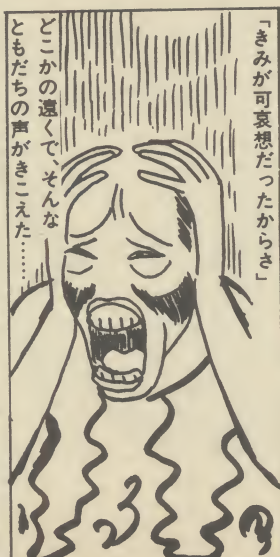
つらい仕事の帰り途でこれまで太郎にあったのは何だった？ぐるぐる回る泡のつぶやきと波形にゆれる口笛だ
でもいまは「ほんとのともだち」と口に出しても嘘じゃない、山の頂きにだってとどくのだ

ああ！ああ！今夜、今夜のユメこそ
イエイ！
神さんのくれたいっとういいユメになるんだな！

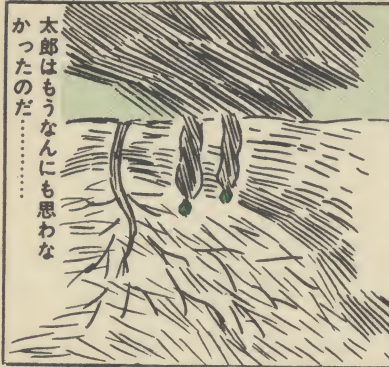
ほんとのともだち！

いやはや……ポトン！と椎の実は己が身を高みへとやるために落ちるね　だがな……
それはともだちと村のきりょうよしとの祝言の晩だった
どんこ
どんこ
どんこ

花は咲いてほどけるから此の世の花で、でなけりゃそいつはただの花になってしまうんだ
どん
どん
どん
どん
どろ
どろ
どろ
どろ
どろ

みんなは盃をやりとりして、やがてともだち夫婦に関する思い出話しが始まった

青くて深い海の底で太郎はみにくいカニのようにさびしかったんだなあ……

こんなことを言ってしまったんだ…

たくさんの手の平がヒラリと背中を見せて、海の底でユラユラゆれたんだ………

それから太郎は
もっと人と話さなくなり……
森や岸辺で
ただただともだちとの一から十を
点検しては日を過ごしたのだ

「あの時ブドウの木の下で……」
「あの時滝つぼの中で………」
とな…………
むこうの泉のそばをともだち夫婦
がさかしまになって行くのが
見えたが………
太郎はもうなんにも思わな
かったのだ………

この村の丘の頂きには一本の高い木が
あって、
いつか太郎の姿はそこにばかり
見えるようになった
ある日太郎が峠を見ていたら
なにかがやってくるので……

「鬼がくるぞう!」
と叫ぶと村人はあわてて
かくれた
あとで死にかけた
クマとわかっても
みんなのコソコソかくれる
姿を眺めるのが
太郎の暗い生きがいに
なってしまったんだな…
鬼だあ!
「鬼がくるぞう!」
「鬼がくるぞう!」
「鬼がくるぞう!」
と太郎の絶叫は
山の向こうにまで
こだまして………
鬼はほんとうに
来たのだ

そいつは青黒くやせていまにも村中のやつらを
喰いそうだった
「ほんとの鬼だぞう!」「ほんとの鬼だぞう!」
だが村人はだれ一人きかなかったのだ
太郎は迷って、迷って考えて、考えて泣いて
鬼に言ったんだ
鬼よ

「鬼よ、鬼よ、おれの身はウマイぞ、だがおまえがおれを喰おうと
してもおれはあの木のてっぺんへ逃げるだろう、だがだが、
おまえがマズイ村のやつらを喰わないのならおれが喰われ
てもやろうじゃないか、そろそろ生きるのにもあきたからなあ」
ようし
わかった早く
喰わせろお

でも太郎をつかみ喰おうとし
て鬼は言った
「クンクン、おまえはウソツキ
のにおいがする、こんな臭い
肉を喰うのはイヤだ
そのかわり、おまえの口がも
っともっとうそをつけるよう
かたいクチバシに、世界中の
やつらをだませるように
背に翼をやるから、
てめえ!とっとと消えうせ
ろお!!」

いま、キツツキに変ったうそつきな太郎は眺めていた
昔しのともだちも、あの時太郎をすまなそうに見ていたその女房もその子どもも
すべてのものが喰われて消えていくのをな………
ゆるして
たすけて
なぜだ
いまや
ただの花が咲くのだ……

鬼の跡にはガイコツが丘の上にまでつづき
そこから木の芽が吹き木になった
それらの一本一本にとまってキツツキの太郎は話しかけるのだ

みんないなくなった此の世の中でな
ほんとのともだち
コツン…
コツン…

だからキツツキは今でも森の空を回ってはコツン、コツン、トンテンカンと幹を叩いては点検しているんだよ
トントン
カラカラ
うそをつけば自分だけがそんな世界にとどまってしまうというお話しだ

という
んだな
………

ふうん
………

………
うそは
だれでも
つくんかなァ

う～む
そんなことはないぞう、赤子はつかないぞう
それから死んだ人もな

ねえちゃんはどうだ?
おたえばちゃんは?
ねえちゃんだってうそつくよ
おばちゃんだっても…

じゃあ平ちゃんは？
おいら……おいらなんかうそつきだい……

おいらなんかキツツキになるんだい………
………
………あ

啞のききょうさんもウソつかねえや

うーん………

そうだな

一筆啓上仕候
イッピツケイジョウツカマツリソーロ

………
………

は～あ～

ヒ

カタカタ

カポロ

お抹茶アメ

ペチャペチャ
あ〜
あんまい！
おさんぽ
怒る之図
ヨタカめの小便

ウッ
フッフッ

はい
おこんばんわ

…………

……

イビキかいてら
グー
グー

ムズ

アッ
鼻穴
いごいたっ！
ふっ…
う〜ん

ねえちゃん
病気
いたい？
いたい？
あっ
あっ
くるしい
よう

どこかで
平吉の声
きこえた
気がした
よう…

ねえちゃん！
ねえちゃん！
ここだよう
おいらここに
いるよう！

あっ
平吉さん
平吉さん
ねえ
ちゃん…

うえっ
ゴホッ
ゴホッ

オネガイ
平吉さん
あたしの
紙ボッチャンを
取ってきて
ください
ネ
ン！

紙ボッチャン
紙ボッチャン

紙ボッチャン
どうぞ
あたしが死んだら
平吉さんのところに
行ってやって
くださいネ
どうかどうか
オネガイです
あたしなんか
もういいんです

平吉さん
これを
あたしだと
思って
大切に
してネ……
おいら
大切に
するようっ！

あっ！
あっ！

おねえ
ちゃん…
おねえ
ちゃん…

おたえばちゃん
の言うこと
よくきいてネ
たまには
おじいちゃんの
世話をして
あげてネ

おねしょ
やめて
イイコちゃん
になってネ
ワガ

ああぁっ
病気の
おッ月さん
昇ってく
うっべ～ん

死んじゃ
イヤだよーっ
イヤだよーっ
ねえちゃん
死んじゃ
イヤだよーっ

おいらが
悪かった
よおうっ

エンマさんに
うそついたから
ねえちゃんが
死んじゃうよーっ
おいらうそつき
だよーっ
おいらが
おねしょを
やめるから
ねえちゃん治して
くださいって
たのんだのに
またおねしょを
したからだよーっ
おいら
おいら
かあちゃんも
とおちゃんも
ねあちゃんも
みんなみんな
いなくなっちゃう
よーっ
イヤだよーっ

おいら
なんか…
おいら
なんか
……

エーン
エーン

平吉……
ひっ

ねえちゃん
大丈夫だ…
もう
治るから…
ひっく
ひっく

ネ……
………

アッタ
カイ……

うん
……

オチチ
ウン……

イイヨ

ホラ

カタイ
ウン……

……

アメ
なめな

カポロ

ききょうの
おばさんが
くれたん
だよ……
……
カポロ

ねむり
……

次回へ